GP＋1（総合診療医＋ひとつの得意・専門分野を極める）セミナーを開催

著名な講師陣を招き 全国から70人を超える参加

GPは一般的にはgeneral practitioner＝〝総合診療医〟の略です。耳原総合病院では、総合診療やERで何かひとつ得意分野を持ちたい人や、専門領域を極めながら総合的なことも大事にしたい人を養成したいとの思いから、GP＋1（general practitioner＋one speciality）を医師養成の合言葉にしています。

GP＋1の第1回目は、7月末にみみはらホールを会場に開催しました。講師には岡秀昭先生（埼玉医科大学総合医療センター）、山本剛先生（西神戸医療センター）、長尾大志先生（滋賀医科大学付属病院）をお招きしました。

そして、当院の藤本卓司先生も加わり、感染症と呼吸器疾患をテーマにした4人の豪華講師が一堂に会する〝奇跡の〟セミナーを実現することができました。

facebookに3800以上のアクセス

この企画のもうひとつの成果は、全国各地からの医師、研修医そして医学生の参加が、これまでにない規模で得られたことです。インターネット上で参加者の募集をしたところすぐに定員に達し、75人の参加がありました。企画を扱ったfacebookへのアクセスは実に3,800件にも上りました。

どの講師からもすぐ実践に生かせる内容を分かりやすく伝えていただき、ベテランから若手まで幅広い参加層に満足してもらう結果となりました。

これからも、このような企画を通して、耳原総合病院の医師養成を盛り上げていきたいと思います。

（耳原総合病院医局事務課課長　川畑　望）

理事会報告

8月度理事会（概要）

8月24日（木）午後7時から理事28名、監事2名の出席で2017年度：第23回理事会が同仁会本部3階で開催されました。

理事長挨拶のあと、専務より会務報告、その他友の会活動等の報告が行われ、出席理事全員が報告及び協議事項について確認・承認しました。

〈主な内容〉

①全日本民医連、大阪民医連、拡大常任理事会報告
②看護師確保推進委員会報告
③健康友の会みみはら代表世話人会議報告
④次期役員体制案についての提案
⑤7月度経営結果についての報告
⑥その他
・社保平和委員会報告
・協同基金推進委員会の報告
・役員共済規程の廃止の提案
・理事会運営改善プロジェクト設置の提案
・旧役員、評議員の労をねぎらう会開催の提案

腰痛ストレス解消へ

「ノーリフト講習会」に参加して

ノーリフト協会認定講師の渡邊千鶴子先生（千鳥橋病院元看護師HPH課課長代行）を招いて、耳原総合病院HPH委員会企画の「ノーリフト講習会」が8月5日に行なわれました。

「ノーリフト」という言葉、皆さんはご存知でしょうか。No（～しない）Lifting（持ち上げる）ということから、「持ち上げない」介助をして腰痛を予防していくという言葉です。

今年の春、当院の職員を対象にアンケートをとったところ、看護師や介護士では腰痛が職業病としてある中、リハビリスタッフや医師にも腰痛持ちが多いという結果がでました。

今回の講習会では、いかに患者さんを「持ち上げずに、寝返り介助、移乗介助をするか」について実技も交えた講義をしていただき、楽しく、有意義な時間を過ごすことができました。

まず、重たい椅子の運び方という日常よく行う動作を通して、腰に負担をかけない体の使い方を学び、私を含め参加者の全員が普段運ぶのが大変な椅子を軽々と運ぶことができ驚きました。そのあと、実際に参加者が患者役になり、寝返り介助の方法、ベッド上の患者移動介助（患者さんをベッドの枕側やベッドサイドに移動させる介助）についても学びました。

スライディングシートや手袋、トランスファーボードを利用した腰への負担が少ない方法について学ぶことができ、とても勉強になりました。

また、介護用品や福祉用具は値段が高いですが、今回、「ビニール袋」や「プラスティック段ボール」を利用した、とてもエコで実用的なアイデアについても教えていただくことができました。

これからは、今回学んだことを職場に広め、少しでも腰痛によるストレスを減らしていく活動をしていければと思います。

（耳原総合病院リハビリ科理学療法士・HPH委員　田中　雄恭）

連載　最終回

耳原総合病院建替え事業にみる協同の思想

立命館大学産業社会学部教授
都市社会学者・同仁会理事　リム・ボン

（前号よりつづき）

おわりに

耳原総合病院建て替え事業は成功した。以下、その理由を挙げてみよう。

第一に、難問が生じる度に、これらを打開するために体を張って奔走した人々がいたことだ。とりわけ、建設委員会が発足する前の段階での準備作業はある意味で壮絶であったが、そのような努力についてはあまり知られていない。彼らも苦労を声高に語らない。傍らでその様子を観察していた筆者は彼らのことを心から尊敬している。

第二に、医師、看護師、職員、友の会メンバー等、関係者たちがプロジェクトに積極的に参加し、凄まじいパワーを発揮したことだ。そのエネルギーと質の高さは日本のまちづくり運動の中でも最高峰に位置付けられる。まさに「ザ・パワー・オブ・ミミハラ」と称するに値する。

第三に、外部に「耳原ファン」がたくさんいたことだ。耳原病院の「無差別平等、地域医療への貢献」という理念に共鳴し、積極的に協力してくれた。思想信条を超えて、純粋に、耳原病院のために貢献しようとしていた。これには正直驚いた。

社会医療法人同仁会の英断によって新たに設置された地域交流ゾーン。これこそ耳原総合病院の真骨頂だ。より多く、より広く（国内だけでなくグローバルに）、「耳原ファン」を獲得していくための装置となる。これをフルに活用するための知恵と工夫が必要だ。今後の展開が楽しみだ。

（おわり）

※文章中の肩書は当時のものです。